新富町文化財調査報告書　第 28 集

祇園原古墳群 2

国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書(2)

1 9 9 9

新富町教育委員会

1．３区全景　南西から

2．３区全景　南東から

序

新田原古墳群は新富町の北西台地面にある国指定史跡です。これまで西都原古墳群の影に隠れてあまり知られていませんでしたが、古墳時代後期に造られた首長墓のなかでも宮崎県最大規模であることがわかってきました。

町ではこの重要な史跡を後世にわたって保存するため史跡整備計画を立案しました。具体的な整備手法は未定ですが、実施計画策定に向け数年間の発掘調査を行う予定です。

本年度は昨年度から開始した百足塚古墳の発掘調査の２年目になります。今回の調査で検出された大量の形象埴輪は宮崎県では初めての人物や鳥・鹿・家など豊富な内容になっています。

これら多くの出土遺物は今後の史跡整備で活用し、文化財保護の啓発や広く生涯学習の場に寄与させようと考えています。

最後になりましたが、関係者の方々には調査に際して多くのご助言やご協力を頂きました。この場をかりて御礼申し上げます。

平成11年３月

新富町教育委員会
教育長　　清　　郁　　雄

例　　言

1．本書は平成10年度に行った宮崎県児湯郡新富町に所在する新田原古墳群の史跡整備にともなう発掘調査の概要報告書である。

2．発掘調査は「新田原古墳群記念物保存修理・一般」事業として文化庁の国庫補助金の交付を受け、宮崎県文化課及び新田原古墳群史跡整備専門検討委員の指導のもと、新富町教育委員会が行った。

3．本書の執筆・作図・編集は有馬が行った。

4．本書で使用する写真は航空写真を株式会社スカイサーベイに委託し、全景写真等を宮崎県埋蔵文化財センターの東憲章氏に撮影・指導して頂いた。

5．本書で使用する方位は第1・2図が座標北で、第3図が磁北である。レベルは海抜絶対高である。

6．本書で使用する地図は第1・2図を建設省国土地理院発行の2万5千分の1図をもとに作成した。

7．調査で出土した遺物と関係図面等はすべて新富町社会教育課で一括保管している。

本文目次

1．発掘調査の経緯

1．新田原古墳群史跡整備基本計画 …… 1

2．短期整備と発掘調査 …… 1

3．調査体制 …… 2

2．位置と概要

1．一ツ瀬川中流域の古墳分布とその特徴 …… 2～5

2．祇園原古墳群の概要 …… 5～6

3．百足塚古墳の発掘調査概要

1．墳丘の現状 …… 6～8

2．調査の概要 …… 8～10

3．まとめ …… 11～12

写真図版 …… 13～18

1．発掘調査の経緯

Ⅰ．新田原古墳群史跡整備基本計画

「新田原古墳群」とは児湯郡新富町から西都市右松にかけて分布する古墳群の総称で、昭和19年に指定措置を受けた国指定史跡である。その分布域は東西4.5km、南北4.5kmの台地面から沖積平野部であるが、分布の集中する４つのグループに大別できるため、東から塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群とよんでいる[1]。

このうち石船古墳群は昭和16年の陸軍基地建設の際に消滅したが[2]、指定措置をうけた古墳は町有地として買収されており、管理・保護している。ところが、公有化された墳丘は保護対象でありながらも、その外に存在する埋没した周溝や、古墳を取り巻く築造当時の地形など重要な考古学的情報は現在も充分把握されていない。

このような状況のもと、古墳の周辺環境は指定措置から半世紀以上が経過し、大きく変化している。宅地は個々の古墳同士の視界を遮り、農地のほ場整備は旧地形を改変している。

町では平成元年度に管理策定書を刊行するなどの施策を実行してきた[3]。また平成４年度に祇園原古墳群でほ場整備が計画されたのをきっかけとして、指定地の追加と買収、及び積極的な史跡の活用を目的に「新田原古墳群史跡整備基本計画」を策定した。基本方針としては「古墳の保存整備と同時に畑地のなかに点在する古墳の風景をさらに良好なものとし、歴史と自然が融合した景観整備を行う」こととし、対象地域が広大であるため短期・中期・長期からなる30年以上の計画としている。

Ⅱ．短期整備と発掘調査

短期整備は「新田原古墳群」の中でも公有化率が高く、前方後円墳が数多く分布する祇園原古墳群のＡグループを対象とする。Ａグループは墳丘はもとより周溝を含めた古墳と古墳の間が連続して町有地であるため見学者の利便性にあった整備がしやすい。そこで短期整備では、①主要な前方後円墳の復元、②ガイダンス施設の設置、③見学園路の整備を目標としている。

	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度
公有化									
発掘調査									
復元工事									
施設整備									
環境整備									

表１　新田原古墳群短期整備計画進行予定

整備年次計画は平成９年度から17年度までの９年間とし６年間にわたる発掘調査で墳丘の基礎データを整理し、墳丘復元やガイダンスでの展示を予定している。本年度は計画の２年目で、百足塚古墳の発掘調査を継続している。

Ⅲ．調査体制

発掘調査は新富町教育委員会が主体となり、県文化課及び新田原古墳群史跡整備専門検討委員会の指導のもと行った。形象埴輪の検出に際し、国立歴史民俗博物館の杉山晋作氏に特別調査員として現場指導して頂いた。また遺構写真の撮影に際しては宮崎県埋蔵文化財センターの東憲章氏にご協力頂いた。

調査組織は以下のとおり

【総　　括】	新富町教育委員会	教育長	清　郁雄
	社会教育課	課長	図師　勉
		課長補佐	富田次男
【予算執行】		副主幹	山崎和子
【予算管理・事業計画・運営】		主事	有馬義人
【発掘調査担当】		主事	有馬義人
【発掘調査補助員】		嘱託	新森美穂
【指　　導】	新田原古墳群史跡整備専門検討委員		
	福岡大学人文学部教授		小田富士雄
	大阪府立大学農学部教授		森本幸裕
	宮崎大学教育学部教授		柳沢一男
	宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係		重山郁子・松林豊樹
	宮崎県埋蔵文化財センター		東憲章
【特別調査員】	国立歴史民俗博物館助教授		杉山晋作

また、調査時には下記の研究者の方々が見学に来られ、多くのご教示頂いた。

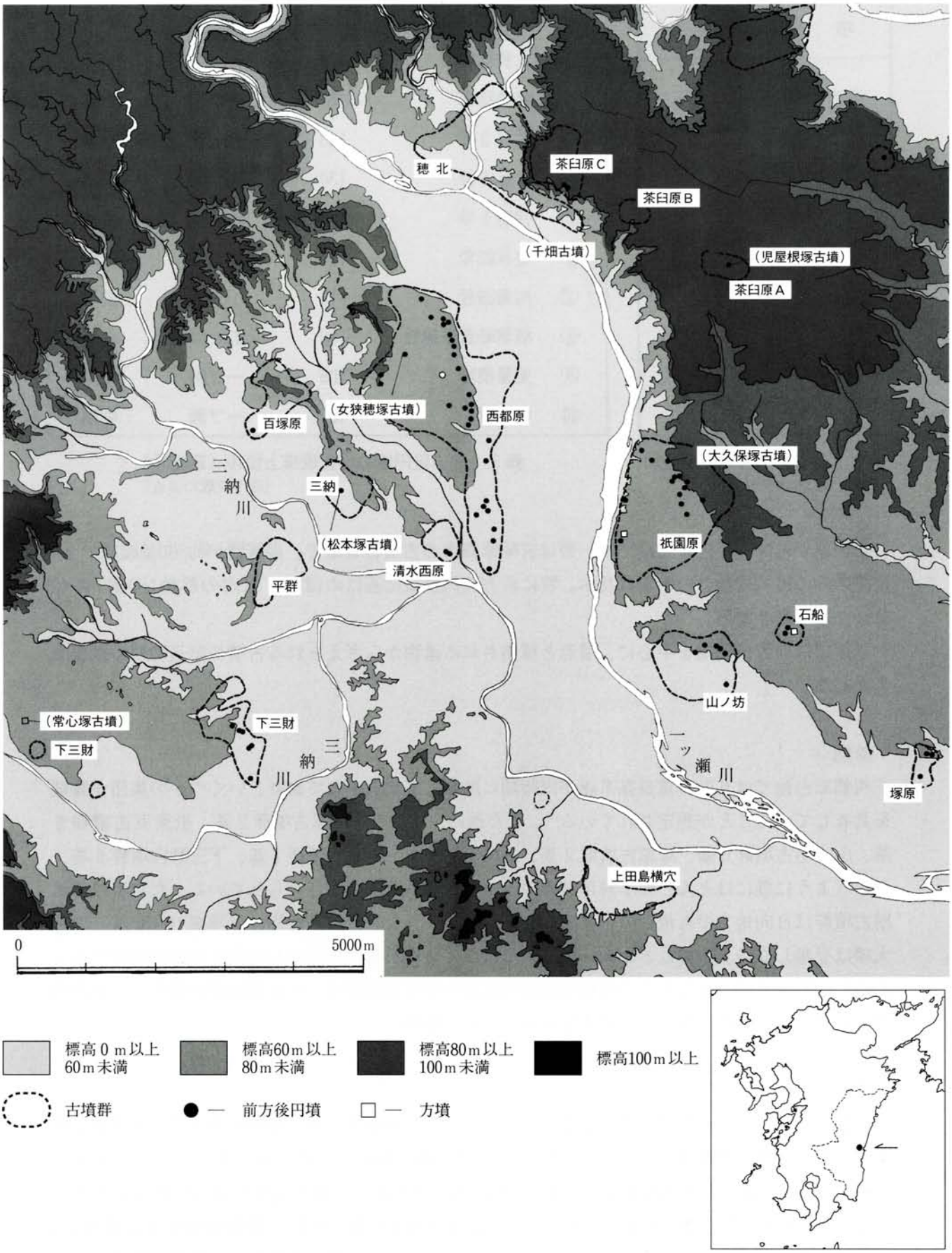
田中裕介、岸本　圭、中村耕治、高橋克壽、古谷　毅、大久保徹也、広瀬和雄、宮元香織、橋本達也、森下章司、今田治代、石野博信、林田和人、金山尚志、置田雅昭、平嶋文博、高橋美久二、池田榮史、藤丸詔八郎、岸本直文、岡村道雄、沢田むつ代、中居さやか、日野　宏、村上恭通、永山修一、桑原久男、西園勝彦、小畑弘巳、藤本貴仁、上原真人、望月幹夫、清喜裕二、松本岩雄（敬称略、県外者のみ）

2．位置と概要

Ⅰ．一ツ瀬川中流域の古墳分布とその特徴

古墳群の立地

一ツ瀬川は九州山地に源をもち、宮崎県のほぼ中心部を北西から南東へ蛇行しつつ、日向灘へ流れ入る二級河川である。その中流域は三納川・三財川等の小河川と合流しつつ幾つもの開析谷を形成し、広い平野部を有している。特に標高60～130mの洪積台地は長い年月に渡る断続的な隆起と浸食によって形成された広い平坦面で、俗に「原（はる）」と呼ばれる。



第1図　一ツ瀬川中流域の古墳群位置図

墳　　形	基　数
前方後円墳	71
円　　墳	717
方　　墳	5
不　　明	6
横　穴　墓	125

表２　一ツ葉川流域の墳形別古墳数の内訳

順位	古　墳　名	墳長(m)	地　域	時　期
①	**女狭穂塚**	**177**	**一ツ瀬**	**中期**
②	**男狭穂塚**	**167**	**一ツ瀬**	**中期**
③	生目３号	143	大　淀	前期
④	生目１号	130	大　淀	前期
⑤	持田１号	120	小　丸	前期
⑥	生目22号	117	大　淀	前期
⑦	川南39号	113	小　丸	前期
⑧	稲葉崎菅原神社	110	五ヶ瀬	前期
⑨	**児屋根塚**	**108**	**一ツ瀬**	**中期**
⑩	**松本塚**	**104**	**一ツ瀬**	**中期**

表３　前方後円墳の墳丘規模上位10（宮崎県）
（注３文献による）

この原から沖積平野にかけての一帯は宮崎県最大の古墳密集地で、高塚墳が約800基確認でき、宮崎県内の古墳総数の約半数に及ぶ。特に前方後円墳は71基にのぼり、県内の総数169基[4]の42％になる（表２参照）。

以下では前方後円墳を中心に、墳形と採集される遺物から考えられる古墳の築造時期の概要をまとめる。

前期

西都原台地では６つの首長墓系譜が同時期に継続して築造されており、いくつかの集団が墓域を共有していたことが想定されている[5]。また他に、左岸の茶臼原古墳群２基、祇園原古墳群２基、山之坊古墳群６基、塚原古墳群２基、三納川流域の百塚原古墳群１基、下三財古墳群５基、というように既にほとんどの小河川流域の台地上に首長墓系譜が認められている。ただ流域の前期古墳群は日向地方でも最大の密集度が認められるが、ついにこの時期には墳長100ｍ以上の超大墳は登場しない。このことから、同流域では多くの中小集団が混在し拮抗した政治情勢であったことが推定され、むしろこの時期は大淀川流域の生目古墳群や、小丸川流域の持田・川南古墳群の被葬者層が優勢であったと考えられる[6]（表３参照）。

中期

西都原台地上の６つの首長墓系譜を統合するように女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳の両墳が登場する。女狭穂塚古墳は墳長約177ｍの前方後円墳で大阪府仲津山古墳と同一平面形でその６割の規模を有し[7]、出土する埴輪類もそれまで宮崎で採用されなった畿内通有の技法で製作されているため[8]、畿内勢力の強い影響下に築造された古墳であると想われる。男狭穂塚古墳は墳長167ｍの日本最大の帆立貝型前方後円墳ないし造出付円墳で、女狭穂塚古墳と近い時期に築造されている。

これらの両墳の登場によって、同流域の首長墓の多くは断絶ないし規模の縮小を強いられたようである。それは他流域の首長墓系譜についても同様であるため、両古墳の被葬者が日向地方の首長を統括する盟主的首長になったと考えられる[9]。

しかし両古墳の築造後、継続して西都原台地上に前方後円墳が築造されることはなかった。今のところその後の前方後円墳の候補は墓域を異にした一ツ瀬川左岸の児屋根塚古墳・大久保塚古墳の両墳があげられる。これらはその墳丘形態や表採される埴輪が女狭穂塚古墳と類似し近い時期の築造が予想される[10][11]。

またこれらの古墳にも継続した古墳が周囲に認められず、5世紀末になって三納川流域に松本塚古墳が登場することから、中期の同流域の政治情勢は非常に不安定であったと推測される。

後期

松本塚古墳築造後、5世紀から6世紀初頭の前方後円墳はよくわからないが、やや時期をおいて、6世紀前半までには祇園原古墳群で継続した首長墓系譜が築造されるようになる。この古墳群の概要はのちに述べるが、おそらく大規模墳と中規模墳が同じ墓域に並列して築造され階層構成型の群構造を示し、7世紀まで継続する大古墳群であろう[12]。

一方、西都原台地では前方後円墳築造の空白期を経て、6世紀後半に2基が場所をへだてて造られている。これと同様に左岸の石船古墳群、塚原古墳群、千畑古墳、右岸の清水西原古墳群などで前方後円墳が築造される。しかし、いずれも50～60m規模で、1～2基程度に終止するため祇園原系譜には遠く及ばない。

これら前方後円墳の築造後、各首長墓系譜は墳形を大型の円墳や方墳に変更する。6世紀末から7世紀前半のことである[13]。前者例では西都原古墳群の鬼ノ窟古墳があり、後者例では石船古墳群の44号墳、祇園原古墳群の138号墳、常心塚古墳などがある。特に注目できるのは常心塚古墳のように、これまでほとんど古墳を築かなかった地に突如として中型の円墳・方墳が登場する例が本県の古墳時代終末期にあることだろう。

その後、列島的に墓制による身分秩序が終わるが、流域の首長層がどのように律令体制の枠組みに参画したかは今のところ判然としない。ただ後に日向国衙や国分寺などが西都原台地に設置されるのは、古墳時代後期までの県内他流域に対する優位性と旧来から小首長層が混在し、彼らの統括する領域の広さが起因しているのではないだろうか。

Ⅱ．祇園原古墳群の概要

一ツ瀬川左岸台地上にあり、154基の高塚墳がある。その内訳は前方後円墳14基、方墳1基、円墳138基、墳形不明1基であるが、発掘調査で検出された円墳の周溝が36基あるので[14]、その数は現在190基になる。

古墳分布域は標高70～90mの台地上で、西側直下には一ツ瀬川が流れ、東は一段高い台地面になっている。また台地には南北に貫入する2本の谷があり、古墳群はこれら谷地形によって区分された4つのグループに大別できる。

Aグループは東側傾斜面を南北につらなって築造された10基の前方後円墳を中心としている。前期には台地北西端部にいずれも前方部が低平で後円部径に対して狭長な前方後円墳が2基築造されている。その後同形の前方後円墳は継続しないが、5世紀中頃になって大久保塚古墳が造ら

古墳名	墳長（m）	周　溝	葺　石	埴　輪
大久保塚	84.0	盾　形	○	Ⅲ
65 号 墳	39.0	?	○	×
67 号 墳	37.4	?	○	×
59 号 墳	71.0	盾　形	×	V
百 足 塚	76.4	盾　形	×	V
水 神 塚	49.4	前方後円形	×	V
機 織 塚	49.6	前方後円形	×	V
52 号 墳	54.8	前方後円形	×	×
68 号 墳	60.4	?	×	×

表４　祇園原古墳群Ａグループの前方後円墳

れる。採集される埴輪や墳形は先述したように西都原古墳群の女狭穂塚古墳や茶臼原古墳群の児屋根塚古墳に類似し、これら３墳の出現は一ツ葉川流域の首長墓系譜を考える上で重要である。

５世紀後半には大久保塚古墳に継続する古墳はみあたらない。しかし今後の調査で中小規模墳の築造時期がわかれば、古墳築造の連続性をあきらかにできる可能性もある。

６世紀になると前方後円墳の築造は爆発的に増加し墳長60～100ｍの大型墳と墳長60ｍ以下の中規模墳が築造され、その多くで埴輪が樹立されている。この埴輪の検討から前者は百足塚古墳→59号墳→弥吾郎塚古墳→68号墳と連続し、後者は水神塚古墳→機織塚古墳→52号墳と連続して築造されたと予想される。これら大規模と中規模墳は平行して築造された可能性が高く、古墳群全体としては中小の円墳を含めた階層構成型群構造であると考えられる。またＢグループ・Ｃグループは前方後円墳をそれぞれ１基ずつ含む後期群集墳である。Ｂグループの霧島塚古墳は時期不明のため詳細にふれないが、Ｃグループは前方後円墳の139号墳ののち140号墳（円墳）・138号墳（方墳）と続く終末期の１首長墓系譜であり、石船古墳群[15]のように６世紀後半になって派生新出したものと考えられる。祇園原古墳群はこれらの首長墓群を中心に小円墳が密集して築造され、その結果200基近い大古墳群を形成したようである。

３．百足塚古墳の発掘調査概要

Ⅰ．墳丘の現状

前方部をほぼ正南に向けた前方後円墳である。墳丘の立地する地形は東から西への緩い傾斜面になっており、このためくびれ部における墳端は東西で１ｍもの比高差があり、東側が高い。

第2図　祇園原古墳群古墳分布図

現状での墳丘各部位の計測データは墳長76.4m、後円径33.2m・同高8.8m、前方幅43.6m・同42.0m・同高8.4m、クビレ幅38.0m、後前高差－0.4mである。

墳丘外表に葺石はなく、盛土による2段築成である。現状でも墳丘の至るところで埴輪片が表採されるので、テラスに円筒埴輪があったものと予想される。

内部主体は詳細不明だが、西側クビレ部に人頭大以上の石が多く見受けられ、等高線の乱れが認められる等から、クビレ部の2段目テラスから後円部中心に向けて開口する横穴式石室の存在が想定される。

墳丘の東側には幅10～15mの周溝が遺存し盾形周溝を推定しているが、西側はほとんど痕跡をとどめない。また西北部には周溝に接するように62号墳と63号墳の円墳があり、62号墳からは百足塚古墳と同じ特徴の円筒埴輪が採集できる。

近接する前方後円墳は南西に水神塚古墳（56号墳）、北東に59号墳があり、いずれの古墳にも埴輪が採用されている。

Ⅱ．調査の概要

調査区の設定と進行状況

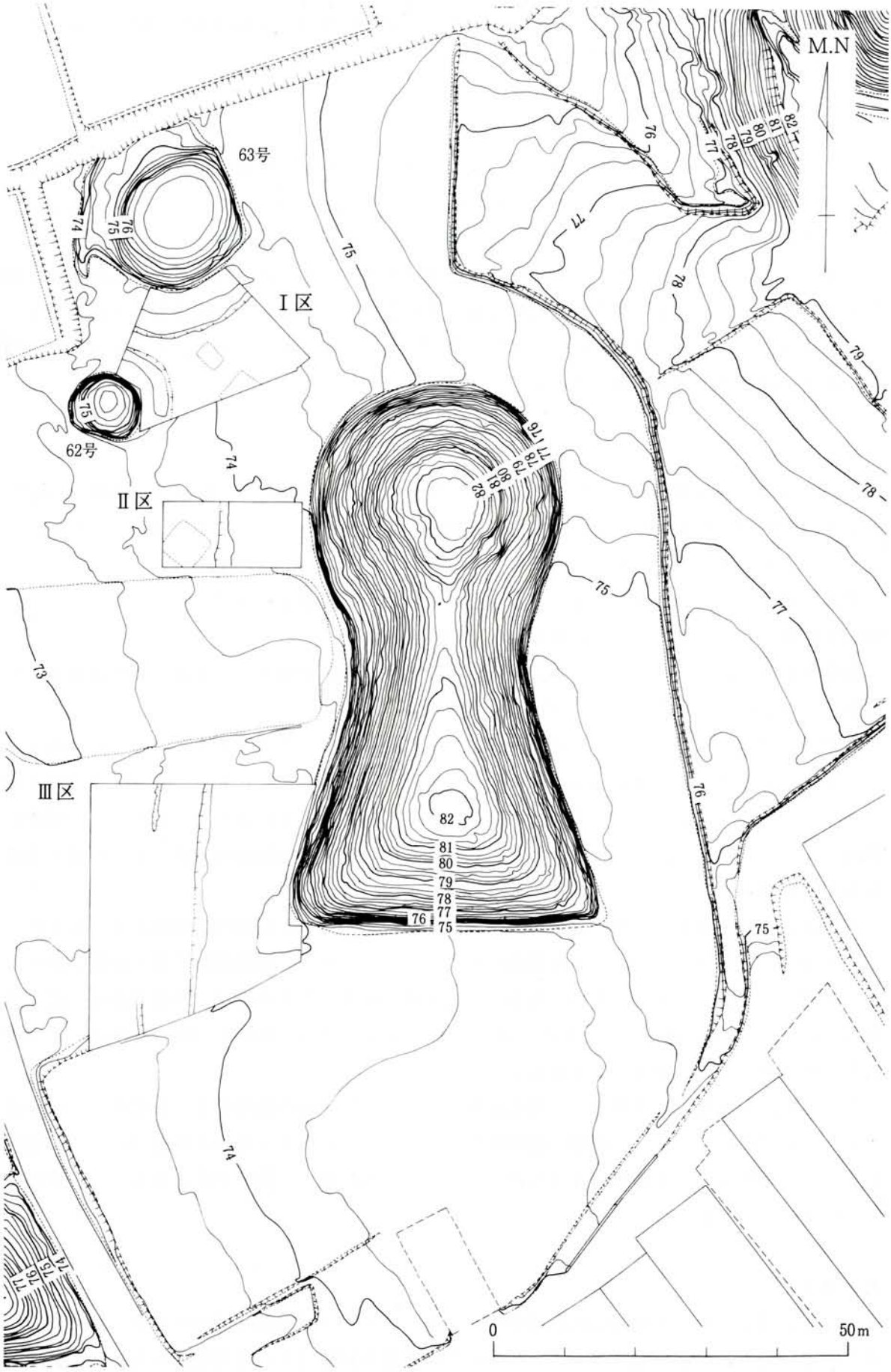
墳丘西側における周溝の遺存状態を知る目的で1～3の調査区を設定した。それぞれの調査面積は1区が360m²、2区が180m²、3区が1,050m²である。調査は平成9年7月から着手し、断続的に進行したため、昨年度はそれぞれが未了のままで中断した。そこで、本年度はこれらの遺物取り上げと実測を目標とし、1区と2区については作業を終了し、3区は遺構実測のみを残している。それぞれの調査区の作業工程は表のとおりである。

1区

百足塚古墳と2基の円墳における周溝の近接状況を把握する目的で設定した。ところが調査区全体にわたって造園による攪乱が及んでおり、百足塚古墳の周溝肩部はほとんど削平されていた。62号墳の周溝は幅3m・深さ40cm、63号墳の周溝は幅3.8m・深さ1mで、両者は切り合うことなく築造されている。

調　査　区	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	面　積
1区　堀方 実測						— —				— —	— —	—	360m²
2区　堀方 実測						— —	— —		—	—		— —	180m²
3区　堀方 実測					— —	— —	— —						1,050m²
百足塚周辺測量									—	— —	—		

表5　百足塚古墳作業工程の実績



第3図　百足塚古墳墳丘測量図

調査区の中央と南端には2基の住居址があり、2号住居址は2本柱の竪穴住居である。出土した土器から弥生中期後半の時期が想定される。

2区

後円部西側に周溝の状況を知る目的で設定した調査区である。周溝の肩部は後円部中心から約32mの位置で検出された。もっとも深い底面は地表から約1.2mで、墳丘に近いほど浅くなっている。周溝の堀方は均一でなく、荒掘りの土坑の連続のような印象を受ける。

周溝の内部からは埴輪片が出土し、墳丘側と周溝外寄りに多く認められた。埴輪の種類は周溝外寄りの南側で鹿形埴輪の頭部片と人物埴輪の男性器があり、ほかは円筒埴輪で占められる。

調査区西側の周溝外の平坦面には2本柱の竪穴式住居が1基検出されており、出土した土器類から弥生中期後半の時期を考えている。

3区

前方部の隅角と周溝の遺存状態を知る目的で設定した調査区である。昨年度は墳端から幅10m、長さ30mの範囲を調査したところ大量の形象埴輪片が出土したため、本年度はその出土範囲を確認するため南へ調査区を拡大した。

前方部隅角は全体的に攪乱が激しく不明瞭であった。墳丘端部は後円部に近づくにしたがって検出面が深くなり、結果として明瞭な状況で検出できた。

周溝の外側肩部は一部を除き明瞭に検出できたが、南側に予想される周溝の隅角は調査区内では発見できなかった。底部の掘り方は全体的に荒い。

周溝外には幅5～6mの平坦面が周溝に沿って認められる。この平坦面上はほとんど削平されているが、検出できた形象埴輪はその両側に転落しているので、もともとこの平坦面に樹立配置されていたと考えられる。この平坦面の西側は徐々に低くなっているため、おそらく「周堤」を意識したものと考えてよいだろう。ちなみに北側の周堤外側には幅50cm・長さ8mの溝状遺構があるが、周溝に沿ってすべてを巡るものではない。

埴輪は墳丘側と周堤の両側に大量に出土した。墳丘側のほとんどは円筒埴輪片でしめられ、もともと墳丘に樹立されていたものが周溝に転落したものだろう。形象埴輪の多くは先に述べたように周堤上に配置してあったものである。うち周溝に転落したものには、人物（巫女・武人風の男性・ほか）、鳥3（鶏冠のあるもの・ほか）、家（寄棟・ほか）があり、周堤外には家（入母屋）、人物、鳥、囲（ないし柵形）などがある。

このうち囲形埴輪は高さ40cmで、底部は短辺20cm・長辺40cmの楕円形で、底部直上と口縁直下にそれぞれ突帯を巡らし、口縁部に鋸歯状を成している。総数7～8体が検出されたこの埴輪はおそらく周堤外よりに等間隔に立てられたもので、内部の家・人物などを区画ないし、守護する意味があったのであろう。

Ⅲ．まとめ

百足塚古墳出土の円筒埴輪は外面調整が一次タテハケのみで黒斑が認められないことから、川西宏幸氏の編年のⅤ期に該当する[16]。同様の円筒埴輪が採用された62号墳とともに6世紀に築造された前方後円墳である。このほか祇園原古墳群Ａグループでは前方後円墳5基、円墳2基で埴

輪が採用されており、6世紀に継続して埴輪を樹立した首長墓系譜である。

なお県内では現在32基の古墳で埴輪が樹立されたことがわかっており、これらをまとめると表6のようになる。このうち形象埴輪が認められるのは総数10基で中期6基、後期4基になる。

番	古　墳　名	地　域	墳　　形	規　模	円筒埴輪	形　象　埴　輪
1	持田34？	小　丸	前方後円墳	60	Ⅳ	
2	持田62	小　丸	帆立貝式	51	？	家（鰹木のみ）
3	川南33	小　丸	前方後円墳	63	Ⅲ	壺形埴輪が共存
4	児屋根塚	一ツ瀬	前方後円墳	108	Ⅲ	
5	茶臼原2	一ツ瀬	円墳	20	Ⅲ	
6	新田原1	一ツ瀬	前方後円墳		Ⅴ	
7	新田原10	一ツ瀬	円墳		Ⅴ	
8	機織塚	一ツ瀬	前方後円墳	49	Ⅴ	動物（足1本のみ）
9	水神塚	一ツ瀬	前方後円墳	49	Ⅴ	人物（破片）
10	百足塚	一ツ瀬	前方後円墳	76	Ⅴ	家、人物、鹿、鳥、囲
11	新田原59	一ツ瀬	前方後円墳	71	Ⅴ	
12	新田原61	一ツ瀬	円墳	10	Ⅴ	
13	新田原62	一ツ瀬	円墳	10	Ⅴ	
14	大久保塚	一ツ瀬	前方後円墳	84	Ⅲ	
15	女狭穂塚	一ツ瀬	前方後円墳	177	Ⅲ	家、盾、蓋、短甲、冑
16	男狭穂塚	一ツ瀬	帆立貝式	167	Ⅲ	
17	西都原169	一ツ瀬	円墳	48	Ⅲ	家、舟、短甲
18	西都原170	一ツ瀬	円墳	45	Ⅲ	家
19	西都原171	一ツ瀬	方墳	25	Ⅲ	家、短甲、盾、蓋
20	寺原古墳	一ツ瀬	円墳	10	Ⅲ～Ⅳ	
21	松本塚	一ツ瀬	前方後円墳	104	Ⅳ～Ⅴ	
22	三納20	一ツ瀬	円墳	27	Ⅳ～Ⅴ	
23	三納24	一ツ瀬	円墳	16	Ⅳ～Ⅴ	
24	三納25	一ツ瀬	円墳	11	Ⅳ～Ⅴ	
25	藤岡山東陵	大　淀	前方後円墳	84	Ⅲ～Ⅳ？	
26	下北方1	大　淀	前方後円墳	72	Ⅴ	
27	下北方旧2	大　淀	円墳	10	Ⅴ	
28	下北方3	大　淀	前方後円墳	68	Ⅲ～Ⅳ	
29	下北方13	大　淀	前方後円墳	100	Ⅴ	人物、動物、盾、舟？
30	住吉1	大　淀	前方後円墳	65	Ⅲ～Ⅳ	
31	木花1	清　武	前方後円墳	43	Ⅴ	
32	高城牧ノ原1	西諸県	前方後円墳	50	Ⅴ	

表6　宮崎県内の埴輪採用古墳一覧（ただし壺形埴輪類は除く）

※　円筒埴輪は川西宏幸氏の編年をあてはめたもの

百足塚古墳と前後する時期の例としては宮崎市下北方13号墳[17]がある。同墳からは昭和26年の発掘調査で、円筒埴輪、馬、人物、船？などが出土しており、調査の記録によるとこれらは後円部の２段目テラス上に樹立されたものと推定される。なおこの古墳には明確な周溝が確認できず、百足塚古墳同様の周堤上配列があるかどうか判然しない。

このように、県内での類似比較は全体の総量と調査例の少なさから困難である。一般的に宮崎県内を問わず西日本では６世紀になると埴輪の製作樹立が低迷すると考えられ、特に形象埴輪は関東に比べると数量が少ない。しかし列島の南端の地でこのような埴輪を配置する例が確認できたことによって、中期以降に列島に伝播した円筒埴輪と形象埴輪による墳丘表飾の実体が今後研究できる好例になるものと考えたい。

なおこの発掘調査は次年度も継続する予定で、出土した埴輪は現在整理作業中のため、詳細を紹介できなかった。まとまりしだい随時報告したい。

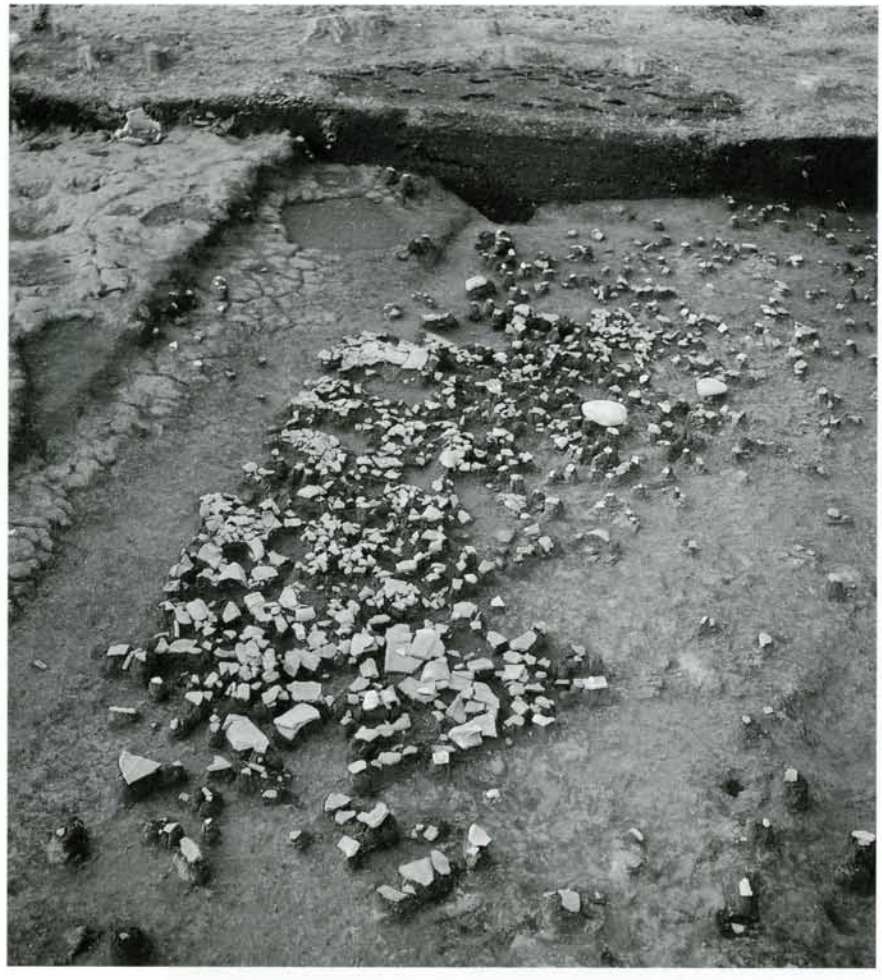
【注】

(1) 有馬義人「祇園原古墳群Ⅰ」『新富町文化財調査報告書』第25集　1998
(2) 梅原末治「新田原古墳調査報告」『宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告』第11輯　1941
(3) 有田辰美「新田原古墳群管理策定書」『新富町文化財調査報告書』第10集　1992
(4) 宮崎県史編さん室『宮崎県史叢書　宮崎県前方後円墳集成』1997
(5) 柳沢一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第14号　1995
(6) 注５文献
(7) 岸本直文「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第39巻２号　1992
(8) 高橋克壽「西都原171号墳の埴輪」『宮崎県史研究』第７号　1994
(9) 注５文献
(10) 柳沢一男・有馬義人「宮崎県の考古資料(2)」『宮崎考古』第14号　1995
(11) 有馬義人「児屋根塚・大久保塚古墳の埴輪」『宮崎考古』第14号　1995
(12) 注１文献
(13) 柳沢一男・有馬義人「宮崎県」『前方後円墳の終焉』第43回埋蔵文化財研究集会資料　1998
(14) 飯田博之「祇園原地区遺跡」『県営農村基盤整備パイロット事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』宮崎県教育委員会　1996
(15) 長津宗重「各地域における最後の前方後円墳－宮崎」『古代学研究』102　1984
(16) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2　1978
(17) 永友良典「下北方古墳－遺物編－」『埋蔵文化財調査報告』Ⅲ　宮崎県総合博物館　1990

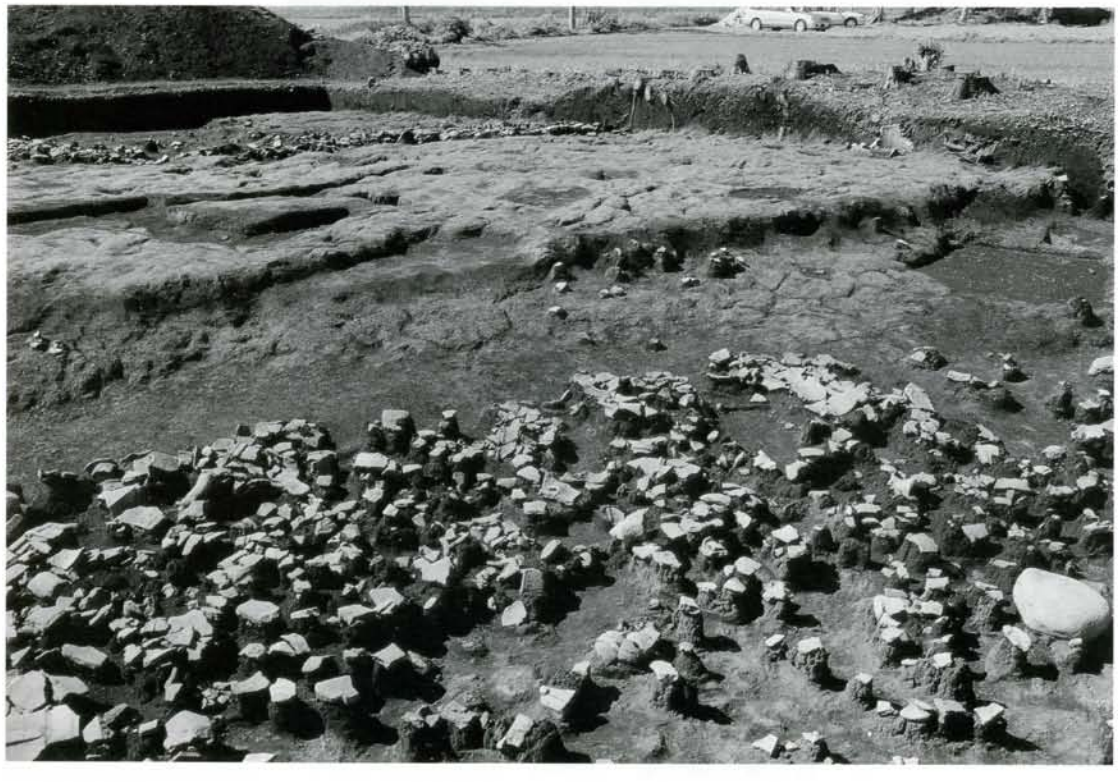
1．百足塚古墳全景　南から

2．百足塚古墳全景　上から

図版２



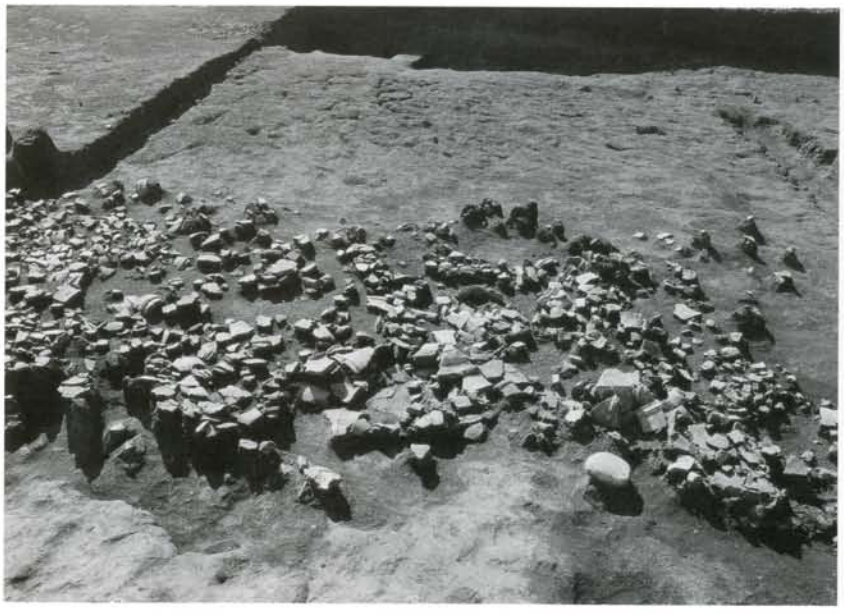
１．周溝内側出土状態（３区：南から）



２．周溝内側出土状況（３区：南東から）

1．外堤外側出土状態
（3区：北から）

2．外堤外側出土状態
（3区：東から）



3．外堤外側出土状態
（3区：東から）

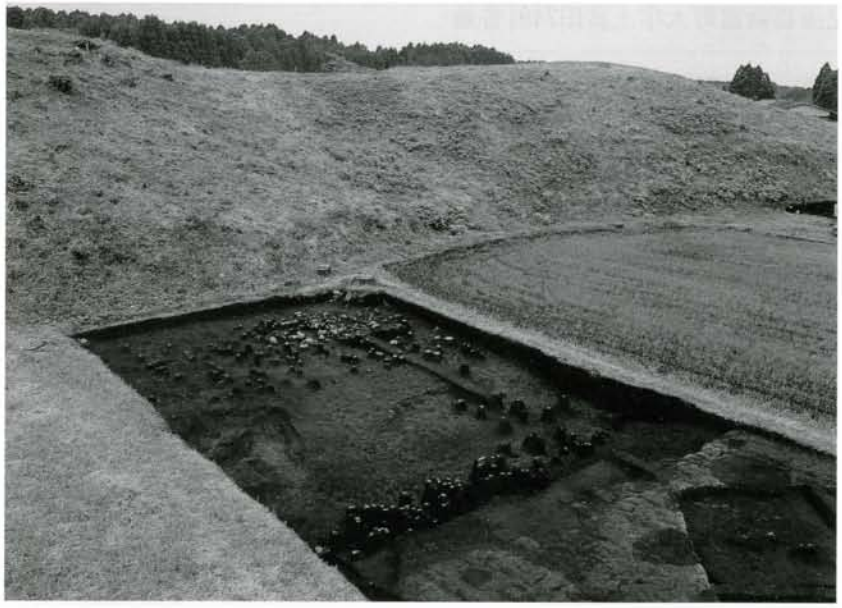
図版 4

1．1区全景　東から

2．1区63号周溝

3．1区62号周溝

1．1区SA 2



2．2区　全景

3．2区SA 3

報　告　書　抄　録

ふりがな	ぎおんばるこふんぐん2
書名	祇園原古墳群2
副書名	平成10年度「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書
巻次	2
シリーズ名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第28集
編集者名	有馬　義人
編集機関	新富町教育委員会
所在地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地
発行年月日	1999年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
百足塚古墳（むかでづかこふん）	新富町大字新田字東俣	47	1001	980715 ～ 990331	1,590㎡	史跡整備

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落 古墳	弥生時代 古墳時代	弥生時代の住居 古墳の周溝・周堤	弥生土器 形象・円筒埴輪	周堤上の形象埴輪配列

新富町文化財調査報告書　第28集

祇園原古墳群 2

発行年月日　1 9 9 9 年 3 月
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　㈲印刷センタークロダ